

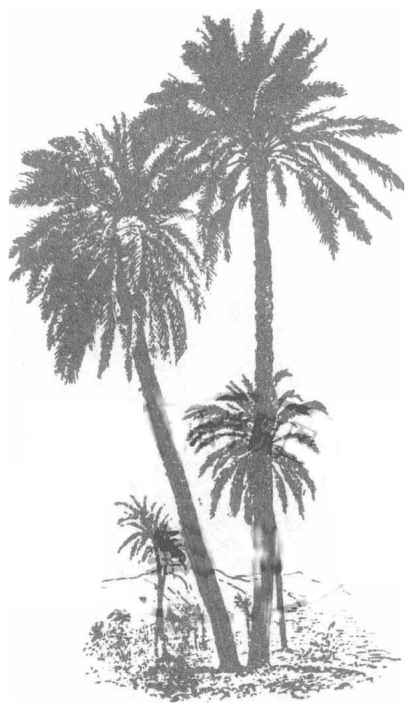
南太平洋フリールドノート
はじまりはトンガ
石毛直道

平凡社

はしよりはトンガ

南太平洋フィールドノート

石毛直道



平凡社

石毛直道 (いしげ なおみち)

1937年千葉県生まれ。国立民族学博物館教授。
主な著書に『住居空間の人類学』(鹿島出版会),
『リビア砂漠探検記』(講談社),『ハオチーノ
鉄の胃袋中国漫遊』(平凡社),編著に『論集
東アジアの食事文化』(平凡社)等がある。

はじまりはトンガ 南太平洋フィールドノート

発行日 一九八八年六月十六日 初版第一刷発行

定価 二二〇〇円

著者 石毛直道

発行者 下中直也

発行所 株式会社平凡社

東京都千代田区三番町五 郵便番号一〇二

電話 東京(〇三)二六五―〇四七一(編集)

(〇三)二六五―〇四五五(営業)

振替 東京八―二九六三九

印刷所 東洋印刷株式会社

株式会社東京印書館

製本所 大口製本印刷株式会社

© Naomichi Ishige 1988 Printed in Japan

落丁・乱丁本のお取替えは直接読者サービス係までお送り下さい
(送料は小社で負担いたします)。

はじまりはトンガ

目次

トンガ

トンガに着くまで 9

トンガ遠征隊装備覚え書 35

ポリネシア

ハロの味 49

ポリネシア人の移動と探検 53

ミクロネシア

71

47

7

カロリン諸島の旅 73

カモチの島 96

ポタへの宴 100

よばい棒 107

西ニューギニア中央高地

裸の紳士たちとともに 119

ウギンバ村の優雅な一日 144

ニューギニア高地人の背景 158

パプア・ニューギニア

221

民芸立国論 223

裸の島と泥面の山 230

ハルマヘラ

249

サゴヤシの村から 251

リマウ村の生活 275

サゴヤシ経済と農耕文化の歴史 294

海の半球

309

オセアニアのカヌー

311

海の半球

330

あとかき

349

カバー表・海辺で遊ぶ子ども

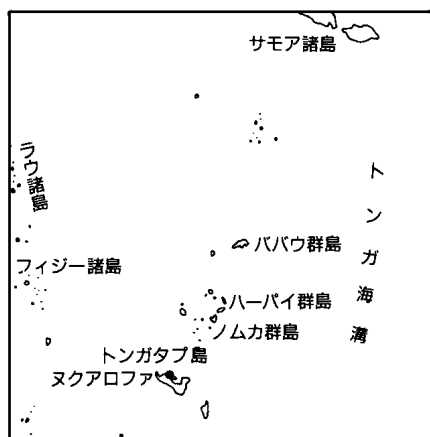
ナチック島

カバー裏・ナチック島のカヌー

写真・石毛直道

装幀・三村 淳

トンガ



トンガに着くまで

一九五九年の秋のことである。当時、わたしは京都大学の二回生であった。大学の講義はさぼってばかりであったが、探検部の部屋には毎日顔を出していた。ふりかえってみると、わたしの学生時代は文学部で過ごしたというよりは、探検部で過ごした日々であった。

その夏、わたしは、探検部の仲間たちと、トカラ列島の宝島の調査に出かけた。この頃、探検部の学生たちには、アジアの内陸部やヒマラヤの探検をめざす登山派と太平洋の島へ出かけようとする「水軍」派の二つのグループがあった。

「水軍」派は民俗学者の故宮本常一先生からの影響もあって、日本の離島調査をよくやっていた。離島という、小さなサイズで完結した環境は野外調査のトレーニングの場としては絶好である。それに、短い距離であっても海を渡るというロマンチズムを満足させることができた。外貨が自由化される前のことである。学生が海外へ出かけることは困難であったし、かりにそん

な機会にめぐりあわせても航空機を利用して渡航することは考えられなかった。貨物船に安く便乗させてもらって出かけるのがふつうであった。形だけでも船に乗って出かけなければならぬ。離島は、いつか、もっと遠い海のかなたへ行きたいと考えている学生たちには魅力的なフィールドであった。

宝島の調査から帰ってきた飯田博とわたし、おなじ夏、北海道の離島へ出かけてきた岡田敏の三人が九月に探検部の部屋で顔をあわせた。この三人で語りあったのは、「遠い南の島へ、赤道のかなたの島へ行こう」ということであった。

南太平洋の地図をひろげて、あまり人に知られていない、面白そうなフィールドがないかをさがしはじめた。一〇月になると、トンガ王国が、わたしたちの遠征のターゲットに定まった。

当時、大阪市立大学に勤務しておられた川喜田二郎先生は京大探検部の顧問であり、「チベット二郎」というあだ名のしめすようにヒマラヤ探検に熱中されていたが、「水軍」派の学生にも理解をしめされていた。

「同僚の藪内教授がトンガ王国に興味をしめされている。トンガ王国へ漁業指導に行っている和歌山出身の人がいるが、藪内教授はこの人もよく知っている。トンガ王国へ行きたいのだったら、藪内教授に会ってみろ」と川喜田先生がアドバイスをしてくれたのである。

さっそく、わたしたちは大阪市立大学の地理学研究室へ藪内先生をお訪ねした。そして、一月中旬には、藪内先生を隊長として、探検部の遠征隊をトンガ王国に送りこむことが決定した。

当時の探検部長であった四手井綱英教授（現在、京都大学名誉教授）と藪内先生が意気投合して、学生たちの向こうみずの計画を支援してくださったのである。

藪内先生からの情報で、皇太子ツンギ殿下（現国王ツポウ二世）が来日されることがわかると、殿下を日本に招いた団体を介して京都来訪を要請した。そうして翌一九六〇年一月初め、当時の平沢興京大総長や京都大学生物誌研究会や探検部顧問の教授たちが、探検部の学生たちとスキヤキ・パーティーに皇太子を招待し、その席で、トンガ王国へ調査団を送る計画を説明した。ツンギ殿下の二日間にわたる京都滞在中、藪内先生と学生たちが終始行動をとみにして、皇太子に京案内をした。「近い将来、わたしの国で再会しよう」ということばを残して、皇太子は京都駅を発っていった。

それから、調査資金や装備集めのため、各企業を訪問したりする忙しい日々がはじまった。講義のほかの時間のほとんどを藪内先生は、トンガ行きのための準備にさかれては、四手井教授、探検部の学生たちといっしょに、会社廻りにつきあってくださった。

一九六〇年六月一〇日、トンガへ向かう韓国の貨物船釜山号^{プサン}にわたしたちは乗りこんで海を渡ることになった。そのメンバーは、藪内芳彦隊長（一九八〇年歿）、当時人文科学研究所員であった藤岡喜愛（現在、甲南大学教授）副隊長、大学院生の堀田満（現在、鹿児島大学教授）、学生の長谷川高士（現在、京都大学教授）、岡田敏（現在、帝人フィルム販売第一部次長）、飯田博（現在、兼松江商運輸部長）、石毛直道で、平均年齢二八歳であった。

六〇年安保の運動が最高潮に達した時期であった。船が南下するにつれ、雑音がおおくなり、聞きとりづらい日本語放送にダイヤルをあわせていた隊員の一人が、国会ヘデモ隊がなだれこみ、女子学生が一人死んだらしい、というニュースをもたらした。

ここまでの文章は、次に掲げる文章とおなじく、「トンガに着くまで」という表題で書いた藪内教授の追悼文の一部を再録したものである（藪内成泰発行『そして人を 藪内芳彦記念文集』一九八六年 非売品）。

わたしたちがトンガから帰国したのは、一九六〇年の十一月一日であった。

学史的には、わたしたちのトンガ遠征は太平洋戦争後の日本人による太平洋総合調査の初期のものひとつに位置づけられる。参加した学生隊員たちは、のちにフィールド・サイエンティストとして大学教授になったり、商社の幹部として海外とのビジネスに従事することになるが、いずれも最初の海外体験であるトンガでの日々がそれぞれの人生に影響をあたえているようだ。

わたしたちのトンガでの調査結果は、藪内芳彦著『トンガ王国探検記』（角川新書 一九六三年）にまとめられた。

わたしはトンガやフィジーで集めた資料を中心に、南太平洋の考古学で卒業論文を書くつもりであった。だが、当時、南太平洋で卒論をつくるといっても、文学部の史学科では

相手にしてもらえず、別のテーマで論文を書かざるをえないこととなった。その後、わたしが考古学をやめたという事情もあり、トンガ調査のさいの考古学資料はまだ眠ったままになっている。

そのほかトンガに関しては、住居について調査した資料をまとめて、『住居空間の人類学』に「島の住居」という章をつくり（鹿島出版会 SD選書 一九七一年）、また、『食生活を探検する』のなかに「南太平洋の島で」という章をたててトンガの食生活を紹介している（初版 文藝春秋 一九六九年 文春文庫版 一九八〇年）。

失われた原稿もある。こども向けの絵本を書いたのである。トンガ人のくらしやトンガの歴史、伝説を織りまぜた紀行文で、自分でさし絵も描き、平易な文章で、こどもばかりではなく、おとなにも読むにたえる本をつくったつもりであった。どこかの出版社に頼まれたのではない。原稿ができあがったら、どこかで活字にしてくれるだろうと安易に考えていたのである。だが、無名の学生の持ちこんだ原稿を相手にしてくれる出版社はなかった。何人かの編集者のあいだをたらい回しになっているうちに、その原稿は失われてしまった。コピーマシンのなかった当時のこととて、控えも残していなかった。

そんなわけで、この本に再収録すべき、トンガでの経験をわたしが記録した文章はない。探検部の雑誌『探検』にのせた「トンガへ着くまで」と「装備覚書」の文章に手をくわえたものを、最初の海外のフィールドの思い出としてあげることにする。

一九六〇年六月一日 晴、夜ときどき雨

午後三時、伴野通商のチャーターした韓国船プサン号に乗船。出港時間になっても動きださない。エンストで、結局はしりはじめたのは、一日の朝。

六月一日 雨

司厨長のおっさんが、韓国のウイスキーをもって、長谷川とぼくの室へ遊びにくる。革命のときの話をしてくれる（註！）。

長谷川、ぼくはスクリューの近くの水夫室、隊長、副隊長はサロンのそばのいい部屋、飯田、堀田、岡田はサロンへ寝る。食事は、船長、上級船員のすんだあとで一同そろって会食、二人のストレッチが食事中そばに立ってわれわれの食事を見守っている。

荒れだした。ローリング・ピッチングで、はてしなく運動するエレベーターに乗せられたようなぼくら。みんな、気分が悪くなったらしい。食事を全部平らげたのは、ぼくだけ。

六月二日 くもりときどき晴

台風にまきこまれている。小山のような波がほえ、風がうなる。天と海とのシーソーゲーム。